

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 石原美奈子

石原美奈子の博士学位請求論文「エチオピアのムスリム聖者崇拝—ティジャーニー導師アルファキー・アフマド・ウマルと西部オロモ社会」は、北アフリカ・西アフリカ各地に広がるイスラム神秘主義の教団ティジャーニーの導師アフマド・ウマルを中心に、エチオピアのイスラム信仰、とりわけその神秘主義と聖者崇拝を描いている。方法はウマルの詳細なライフヒストリーを核とし、ナイジェリアに生まれ、スーダンからエチオピアに入って各地を移動しながらイスラムを広めた彼の人生を追いつつ、彼と関わった人々のネットワーク、各地域の状況と出来事を、オーラルヒストリー、現地調査、文献研究により探求し、エチオピアの民衆的イスラム信仰の様相を、つぶさに明らかにするものである。また論文では、ウマルが 1953 年に亡くなった後今日に至るティジャーニーの動向・変化も明らかにしている。本論文の学術への主要な貢献は、以下の 3 点に、まとめられる

1, キリスト教国として知られるエチオピアには、他にもさまざまな宗教が存在し、イスラムは人口の三割を占める。これまで国際的に、人類学をふくむ人文諸学でのエチオピア研究は、キリスト教徒の社会とその地域に偏ってきた。比較的数の限られたムスリム研究も、イスラム化の歴史、政治・宗教エリートの研究に偏っており、草の根に広がる民衆的イスラム聖者信仰の実態を解明する研究はほとんど欠落している。本論文はこの欠を埋める国際的にも重要なものである。

2, 筆者石原は本研究科の大学院修士課程学生だった頃からすでに 20 年近くエチオピア研究、とくに南西部のムスリム研究に打ち込み、数年にわたる長期の現地滞在と調査も数回繰り返している。本論文はその長年の集中の成果と経験とが結実したもので、全体

的展望と細部の叙述がみごとに結合した部厚く立体的な資料が提示され、人類学的なエチオピア・ムスリムの研究として余人の追隨を許さない充実した内容をもつ。また、明快な語り口と巧みな構成により、エチオピアについて知識を持たない研究者にこの国のあまり語られなかった側面を明らかにし、人文学の分野でのエチオピア理解をおおいに豊かにするものである。

3, イスラムの師であり周囲の民衆から聖者とみなされるに至った人物の人生をたどり、その人生に関わってくるさまざまな人々や地域のネットワークを追う研究は、人類学的イスラム研究の新分野、新たな方法として貢献度が高い。

エチオピアと限らず世界のどの地域でも、イスラムにはカトリックのような単一の中心とヒエラルキー的組織は存在しない。コランの解釈がさまざまに対立する時、裁定を与える教皇や公会議は存在せず、それぞれの地域ごと、異なる時代ごとに優勢な合意が存在するに過ぎない。聖者といってもそれを認定する単一の教会組織はなく、ある場所、ある時代における住民のあいだに何時とはなく形成された不定型な合意が、ある人を影響力の強い師としたり、聖者とするのである。こうしたことを理解するには、個人のつながりやネットワークよりも制度としての集団、メンバーシップのはっきりした集団を捕まえようとする日本の新宗教研究やキリスト教研究の大勢を単純にあてはめることは、理解よりも誤解を生むことが多い。

このことは筆者石原がはじめて唱えたことではない。しかしここから発して、特定のムスリム社会の研究を、一人の聖者の空間的・時間的行程とそれに出会い結びつくさまざまな人々のネットワークとして記述していく本論文の方法は、きわめて斬新なものであり、日本人の多数をふくむ非ムスリムにムスリム社会を提示する方法として、大いに有効と認められる。この点で本論文は、人類学的ムスリム社会研究、人文学的イスラム研究にとって示唆的であり、重要な貢献をしている。

以上本論文は、オーラルヒストリーの方法を用いた歴史的民族誌として、エチオピア研究として、また人類学的なムスリム社会研究の新たな方法をふくんだ重要な成果として、学術に貢献している。審査委員からは、本論文中に概念の使い方が厳密でない点が二、三見受けられるとの指摘もあった。だがこれは本論文の優れた成果を否定するものではない。したがって本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。